

の筆と中上健次「地の果て 前の吉田健一「大衆文学時 川書店」の二冊を園題にし、がある。(旧カルチャー)

# 論壇時評

中嶋 嶺 雄

〈下〉

目標もなく、秩序もなく、それでいて物質的には豊かな社会。校内暴力や家庭内暴力に教師や親が怯えているかと思えば、栄養吸収しすぎた肥満児

目撃もなく、秩序もなく、それでいて物質的には豊かな社会。校内暴力や家庭内暴力に教師や親が怯えているかと思えば、栄養吸収しすぎた肥満児

九七〇年代が「脱産業化」といって、現代社会の混濁のなかにもすべき曲がり角だつたと見る山崎は、「知識集約型産業」と並び

# 文化



## 対照的な日本診断

山崎正和氏と村松剛氏の論文

### 貧困からの解放の否定面

飯田経夫「ソフト化のいかがわしさ」

「情緒集約型産業」が興隆している今日の社会では、より多文化の容易な情緒的情報を重視し、それを創造する喜びを広く分配すること」が問題解決への道だと説く。

これにたいして、村松剛「豊かな社会の相続人たち」(正野のなかで論じている。「デュ

「顔の見える社会」の必要説く山崎氏

「中央公論」(八月号)の長編評論「新しい個人主義の予兆」

「顔の見える社会」こそ「個人主義の基盤であり、歴史的に



スによる日本現代書道展実行委員会と東京新聞が共催、現代一流書家に呼びかけたところ、青山杉雨さんが出品

古代エジプトで発明されたというパピルス紙を使った書道展が東京・銀座三丁目の東京セン

パピルス紙の製法は紀元前七百年ごろ消滅したといわれるがエジプト国立パピルス研究所が十数年前、復元成功した。この古代紙で書かせるかどうか試みたのが今回の催しで、パピルス

でもよく知られた小々な問題ではないかと私自身も目「痛感している。

なお、今月は、森田実「二つの転向」元全学連闘士からみた鍋山貞親の思想と生涯」(中央公論、衛藤藩吉「私の中の「満洲」」(文芸春秋)、岡田晃「北京邂逅」(同)、石川好西氏の詩集「暗黒の夏」(牧羊社刊)に授賞と決まった。

この賞は各年度内に刊行された詩集の中でも最も優れたものに贈るという趣旨で、飯島新一、大岡信、宗近、吉原孝子、四氏が選考委員。賞金百円。第一回の贈賞式は十一月二十二日(日)午後七時、東京・皇居内

「単調で辛い、おもしろくない肉体労働から解放されて、クリエーティブな仕事に移るんだ」といふ。しかし、僕はどう考

えてもいかがわしい面があると「思うんです」と語る飯田の言葉が山崎の言う「新しい個人主義」とどうかみ合つか、かみ合わないのか、両者の実りある対話を期待したい。

飯田は「生活苦から解放されたい」とは実はマイナスマ面がある。ケインズ主義の破綻を招いた」との前提で今日のサービス化・情報化・ソフト化あるいは山崎の言う「情緒集約型産業」時代の否定面を論じている。その否定面を飯田は「いかわしさ」と言うのだが、た

くは、年々華美になる結婚披露宴に「下がってゆくようなサービス産業の隆盛が飯田の言う「いかわしさ」なのである

武田氏の悲劇を認めながら、いまなお、ひっそりと力強さをみせている。

理麗尼が「武田氏への恨みもわすれて」と書いたのは、実は「甲陽軍鑑」によると、永祿三

# 歴史を歩く

◇55◇

(天正十年三月三日)、敗走する勝頼一行は二の峰に宿をうつす。父娘の兄妹にあたる理麗尼(勝沼次郎五郎信友の娘)が二の峰(いおり)を建

かしわをしたのむ御ほとけの歌からは、大善寺での宿をうつす姿をおもひおぼえずにはいられない。大きな、ゆつたりとした

武田氏の悲劇を認めながら、いまなお、ひっそりと力強さをみせている。

理麗尼が「武田氏への恨みもわすれて」と書いたのは、実は「甲陽軍鑑」によると、永祿三



（新編）



校印

東京大学

010000